

面会制限、入浴制限、隔離・・・コロナ禍におけるさまざまな行動制限に、看護職として反証する余地はなかったか。

緊急事態という名のもとに過酷な業務に従事し続けた看護師たちは、正当に評価され、抱いた苦悩やジレンマは、適切にケアされてきたのか。

これまでもコロナ禍における臨床現場の実態を聴く機会を得てきたが、そのつど経験の重さに圧倒され、直接経験していないことの多さに発言を躊躇うあまり、自らが感じたことや考えたことを言語化できずにきてしまった。あらためて向き合ってみたい。

人が感情や考えを言語化する原動力は、何であろうか。私は、誰かの尊厳が傷つけられたときに抱く「怒り」は原動力の一つではないかと思う。そういえば、勉強会では、全体討論でもグループワークでも、繰り返し「『怒り』が足りないのではないか」という問題提起がなされた。コロナ禍で起きた事態に対する看護師の「怒り」が足りないように見えるのは、なぜなのか。

看護師には、患者の身になって最善の看護を提供することが求められているのに、コロナ禍では「本来の看護」が様々な障壁に阻まれ、思うようにできなかったという。そういった看護師個人の苦悩や葛藤の多くは言語化されることもなく、それぞれの看護師が個人の問題として抱え込んでしまっているのかもしれない。

国や組織から受ける指示を絶対視し、そもそも拒否できないものと捉えていれば、看護師は疑問を抱いてもそれを打ち消し、次第に疑問を抱く力自体を失っていくだろう。

コロナ禍が収束したとしても、私たちは今後もさまざまな未知の事態に遭遇することになる。このたびの経験を踏まえて、私たち看護職が今から備えておけることは何であろうか。

勉強会の最後に、コロナ禍における看護師の体験を記録として残そう、匿名性も保持しながら証言集をまとめようという提案がなされた。このように体験を振り返り、言語化することは、コロナ禍の様々な医療現場で看護師個人が何を体験していたのか、看護師がそのつど何を指標に行動していたのかを、正確に社会に伝えることにつながる。同時に、看護師自身大切にされていないと感じたことや、「コマ」のように扱われたという傷つきを体験していたことも記録として残されることで、看護師が適切にケアされる可能性を高めるのではないか。

そして、このように看護師の権利が守られることは、看護師のケアの対象である患者やその家族の権利を守ることに繋がるだろう。今から証言集の完成を心待ちにしている。